

# 古代ギリシアのグリフィンの起源 — 図像学的変遷の再検討 —

武蔵野美術大学  
小石絵美

古代ギリシアのグリフィンは、基本的に鷲と獅子を組み合わせた想像上の怪物として知られ、陶器や装飾具などさまざまな表現媒体で表わされる。その起源は紀元前2千年紀のメソポタミアに遡り、ギリシアでは中期青銅器時代(前20～前17世紀頃)から確認される。

青銅器時代(以下BA)のグリフィンは、鷲の頭部と有翼の獅子の胴を持ち、守護獣や動物を狩る捕食者として登場する。彼らは神の従者であり、決して人間を襲わないのも大きな特徴である。しかし、前7世紀の青銅釜装飾のグリフィンの首に顕著のように、アルカイック時代には鷲の頭とは言い難いぴんと立った耳や丸い突起が出現し、守護獣でありながらも人間を襲う存在へと変化を遂げる。ここがグリフィンの転換期といえるだろう。クラシック時代以降、頭部の突起は消え、頭部から背びれのようなものが出現する。

BAと歴史時代の間には暗黒時代が存在し、一般的に両者は断絶を迎えるとみなされ、グリフィンもその流れに沿っているようにみえる。先行研究は、アルカイック時代のグリフィンの起源を前8世紀頃のアンカラやウラルトゥなどのアナトリアのグリフィンや、人間のように直立するグリフィン魔人としている。その理由として、これらのグリフィンの図像学的特徴がアルカイック時代のものと類似するのに対し、それ以前のグリフィンには認められないことが挙げられる。

しかし、歴史時代のグリフィン頭部の突起が何を表わし、背びれがどのような意図で付けられたのか解明されていない。また、暗黒時代を挟むとはいえ、その前後で全く異なるイメージへと変化したとは考え難いと思われる。

これらの疑問に対し発表者は、オリエント世界には古くから獅子の頭部を持つ獅子グリフィンと、鷲の頭部を持つ鷲グリフィンの2種類が存在することに着目した。先行研究でBAを含む古代ギリシアに獅子グリフィンは確認されないが、もし存在するならば諸問題への一助となるだろう。

発表者は、BAの「ミノア風ゲニウス」と呼ばれる怪物が獅子グリフィンに相当すると考える。「ミノア風ゲニウス」とは、甲羅のようなものを被った獅子が人間のように直立した想像上の怪物で、グリフィンと共に神に仕える者として知られている。彼らの頭部はアナトリアのグリフィンを想起させ、甲羅の多くは歴史時代のグリフィンの丸い突起や背びれのようなものが認められる。

「ミノア風ゲニウス」が歴史時代のグリフィンの起源の一部となり得るなら、前7世紀初頭の東方文化の導入の際、ギリシア人たちにはBAのグリフィンと「ミノア風ゲニウス」の両者を基にする、彼ら自身のグリフィンの概念やイメージのようなものがあり、それに寄り添うように手本である東方のグリフィンの姿を變形し、融合させ、新たなグリフィンの姿を確立したと考える。